

豊かさ住環境に関する心理学的研究（第1報）

——主婦を対象とした分析——

唐沢 かおり (karasawa@info.human.nagoya-u.ac.jp)

八田 武志・高橋 晋也・古賀 一男・久野 覚・原田 昌幸・大森 雄一・豊沢 純子・山岡 洋
〔名古屋大学〕

Japanese housewife's attitude toward "richness in life" and the need for residential environment

Kaori Karasawa, Takeshi Hatta, Shinya Takahashi, Kazuo Koga, Satoru Kuno, Masayuki Harada, Yuichi Ohmori, Junko Toyosawa, Hiroshi Yamaoka

Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University, Japan

Abstract

This study examined the effects of need for "richness in life" on the need for residential environment. Two-hundred and fifty housewives participated in the study and answered the questions to assess the important conditions for enabling "richness in life" and requirement for residential environment to enable the richness in life. A factor analysis for the enabling conditions of richness revealed the seven-factor structure (richness in family relationship and well-being, abundance of material resource, stability and prosperity of work, good interpersonal relations, luxury, and fashionable life style), thus suggested the complexity of the conception for richness. Furthermore, a structural equation analysis revealed that the factors representing the materialistic aspect of richness increase the need for exterior and amplitude of the housing, whereas the factors representing the interpersonal aspect of richness increase the need for the conditions of residential locations. Discussion argued that future studies should include the variables to account for the way people actualize the psychological need for "richness in life" by adopting certain requirements in residential environment.

Key words

richness in life, residential environment, housewife

1. はじめに

豊かな暮らしとは、また、豊かな住環境とはどのようなものであろうか。この問いに答えるためには、まず個人が心に抱く「豊かさ」とは何なのかを考える必要がある。広辞苑によれば、「豊かさ」とは、「物が豊富で心に満ち足りているさま」とある。「財産がたくさんあり、経済的に不足のないさま、富裕」とも記述されている。しかし、広辞苑は昭和40年に初版が出されており、新村出が辞書の項目を記載したのは、まだ戦後の貧しさから抜けきれないでいた時代における豊かさとも解釈できる。現代に生きる私たちは、物が満ちあふれ、つぎつぎに現れる物を短時間の間にゴミとして廃棄するような中で生活している。したがって、物が豊富であることが、心が満ち足りているさまを表すような単純な「豊かさ感」は、すでに崩壊しているのではないか。数年前に「清貧の思想」なる書籍がベストセラーになった現象は、物の豊富さと心が満ち足りるのとは別物であることの証左であり（中野、2000）、物の豊富さが「豊かさ」の第1義の意味であるという見解は、もはや誰もが肯定しないであろう。私たちは、「豊かさ」をそれほど単純にとらえているわけではないのである。

「豊かさ」という語が生み出す意味構造についての調査からも、物質的な「豊かさ」がある一方で、「物」という

視点では記述できない多様な豊かさが重要なものとして存在することが示されている（八田・唐沢・豊沢・山岡、2004）。この調査は、大学生とその親を対象にして、「豊かな暮らし」という言葉から連想する単語を書き出させ、その意味内容を分析したものである。物質的豊かさに関しては、衣食住の基本が満ち足りていることと共に、旅行や贅沢ができるなど、日常生活にプラスアルファの体験を得ることによる豊かさが挙げられている。その一方、「人間関係」、「個人の心の持ち方」、「精神的安定」、「平和や自然との共生」といった価値の追求など、多岐にわたる豊かさの存在が示されている。

もっとも、豊かさ概念については、これまでに詳細な検討が行われているわけではなかった。心理学的研究としては、豊かさそのものではなく、むしろ類似の心的構成概念として、「ゆとり」、「生きがい」、「幸福感」、「人生への満足感」、「生活の質（QOL）」が取り上げられてきている。そこでの研究は、いずれも、経済的側面や物質的側面と共に、時間、精神、生活環境、存在価値、意欲、家庭や友人関係、希望など、幅広い範囲にわたる評価次元の存在を示している（Baumeister & Vohs, 2002; 古川・山下・八木, 1993; Huebner & Gilman, 2000; 近藤・鎌田, 1998; Schuessler & Fisher, 1985）。これらの研究が明らかにしてきた各概念の多様さは、「豊かさ」という概念も、多次的な構造を持つことを示唆している。

本研究は、このように「豊かさ」の概念が多様な側面か

ら構成されていることを前提に、個々人の豊かさに関する志向が住宅に対して求めるものに及ぼす影響を検討することで、「住環境の豊かさ」に対する考察を行うものである。住宅は、個人が購買する「物」の中でも、最も高価なものであると共に、個人の生活ステージとして重要な意味を持っている。したがって、豊かな暮らしを実現するための「場」である住宅に対する要求は、個々人の豊かさに関する志向性を反映したものになるであろう。すなわち、「人生を豊かにする上でどのようなことが重要だと感じているのか」ということが、豊かな暮らしを感じる場としての住宅に対して何を求めるかに影響し、豊かさ概念の多様性が、住宅に対して求めるものの多様性につながると考えられる。また、豊かさに関する重要性の認知と住宅への要求との関係を明らかにすることは、単に住宅に対する好みの個人差を規定する要因を示すのみならず、個々人が追求する豊かさを実現する場として、住環境がどのように位置づけられているのかも示唆することにつながるという点でも重要である。

以上のような問題意識の下に、本研究では、「住宅の豊かさに関する調査」の一環として、「人生を豊かにするために重要と考えるもの」と「移り住むとしたら豊かな暮らしを感じるために求める条件」の2点に関して質問することでデータを収集し、分析を行った。分析は、調査対象者の中から、特に主婦層に焦点を当てて行っている。豊かさに関する重要性の認知は、性別や職業などで規定される社会的な立場により異なることが予測されるため、均質性が高いサンプルを分析対象とすることで、より精緻な分析が可能である。したがって、分析対象を特定の社会階層に限定することが必要であるが、今回は、家族の中で、住宅でもっとも長い時間を過ごすメンバーであり、住環境に対する関心や、ひいては、暮らしの豊かさと住環境との結びつきがもっとも強いと予測される「主婦層」を分析対象として選定した。

2. 方法

2.1 調査対象と実施手続き

本研究で分析したデータは、は2003年度10月下旬から11月下旬にかけて実施された「住宅の豊かさに関する調査」において収集したものである。この調査は、名古屋市内における3地区住居者を対象とし、住宅に関する不満や、要望、住民としての意識などについて、質問紙法で回答を求めるものである。調査対象となった3地区は、(1)比較的古い住宅地である瑞穂地区、(2)比較的新しい住宅地である名東地区、(3)高級住宅地である八事・本山地区であり、それぞれの特性が表1に示されている。実施にあたっては、戸建て住宅の成人居住者を対象に住民基本台帳から系統抽出法により男女比が1:1になるように抽出した者を対象者とし、片道郵送法を用い、3つの地区それぞれに400票（計1200票）を送付したのち、調査員が送付後5日から17日の期間に回収した。有効回収調査票数は832票であり、回答率は瑞穂地区が73.0%、名東地区が70.3%、八事・本山地区が64.8%であった。本研究での分析対象は、この

中から職業について主婦と回答した250名で、内訳は瑞穂地区79名、名東地区79名、八事・本山地区92名である。

表1：調査対象地区の概要

地区名	瑞穂地区	名東地区	八事・本山地区
特性	比較的古い一般住宅地。地区内には高校や大学が立地する文教地区。	比較的新しい郊外の住宅地。幹線道路が通り高速道路インターにも近い。	高級住宅街。調査地区内には商業・娯楽施設はほとんど存在しない
人口と世帯数 (平成15年4月1日現在)	7312人・3117世帯	8644人・3510世帯	5587人・2175世帯
主な用途	第1種低層住居専用地域 第1種中高層住居専用地域 第2種中高層住居専用地域	第1種低層住居専用地域 第1種中高層住居専用地域	第1種低層住居専用地域 第1種中高層住居専用地域

2.2 調査票の構成

本研究の分析対象となったデータを収集した質問票は全体でA4サイズ紙12ページからなるもので、表2に示す質問項目から構成されている。

本研究では表2の設問の中から、設問8「移り住むことを想定したときの立地・住宅要件」と設問9「人生の豊かさに関する重要度評価」との関係を分析した。「移り住むことを想定したときの立地・住宅要件」については、20項目の住居や立地特性に対して、「あなたが移り住むことを考えたとき、豊かな暮らしを感じるためには、次の立地や住宅の条件はどのくらい必要か」を「それほど必要でない」、「必要である」、「特に必要である」の3件法で回答を求めた。また、「人生の豊かさに関する重要度評価」については、豊かさにつながると思われる条件を24項目列挙し、それぞれに対して、「あなたの人生を豊かにするために、以下の項目はどのくらい重要だと思うか」を、「それほど重要でない」、「重要である」、「特に重要である」の3件法で回答を求めた。具体的な質問項目については、表3と表5に記載されている。

表2：質問項目

設問1	住居・周辺環境および生活に関する不満度	57項目
設問2	居住地区に対する評価・愛着	4項目
設問3	対象者および家族の生活状況の特性	13項目
設問4	住居における行動の快適性	15項目
設問5	対象者自身の暮らしのイメージ評価	23項目
設問6	災害に関する認知と防災意識	15項目
設問7	居住場所に関する態度と生活の統制感	5項目
設問8	移り住むことを想定したときの立地・住宅要件	20項目
設問9	人生の豊かさに関する重要度評価	24項目
設問10~12	対象者属性	22項目
		合計 198項目

3. 結果

データ分析は、回答カテゴリに対して、「それほど必要でない・重要でない」に「1」、「必要である・重要である」に「2」、「特に必要である・重要である」に「3」を付与したうえで行った。

3.1 豊かさの重要度評価と移り住むときの要件に関する因子分析

「人生の豊かさに関する重要度評価」については、因子分析により（主因子法により因子抽出した後、バリマックス回転）豊かさ概念にかかわる認知構造を探索した。各因

子に対して、高い因子負荷量を得た項目に基づき、第1因子は「家庭の豊かさ」、第2因子は「資産の豊かさ」、第3因子は「職業の豊かさ」、第4因子は「対人関係の豊かさ」、第5因子は「派手やかさ」、第6因子は「自由と気楽さ」、第7因子は「趣味世界の豊かさ」と名づけた。因子分析の結果は表3に示されている。

表3：豊かさ概念に関する因子分析結果：各因子名・寄与率と因子に対する因子負荷量

因子	1	2	3	4	5	6	7
第1因子：家庭の豊かさ (23.9%)							
家族が健康である	.801	.217	.112	.053	-.058	.145	-.017
健康に暮らす	.789	.258	.083	-.002	-.071	.116	-.017
夫婦円満である	.667	-.028	.101	.227	.099	.017	.116
子や孫が立派に成長する	.597	.013	.042	.202	.200	.059	.129
友人に恵まれる	.506	.034	.058	.317	-.030	.181	.231
第2因子：資産の豊かさ (10.9%)							
いい家に住む	-.084	.707	.089	.071	.167	.039	.169
財産を築く	.062	.695	.307	.093	.134	.014	.046
一戸建てを建てる	.075	.541	.082	.157	.230	.021	.015
第3因子：職業の豊かさ (7.5%)							
安定した職につく	.099	.156	.679	.109	.094	.120	-.120
仕事で成功する	.051	.319	.604	.037	.171	-.059	.101
やりがいのある仕事をする	.149	.040	.595	.318	-.011	-.029	.085
第4因子：対人関係の豊かさ (6.4%)							
上司や部下と良好な関係を持つ	.033	.165	.306	.651	-.039	.163	.027
近隣住民と良好な関係を持つ	.296	.033	-.012	.510	.126	.242	-.220
周囲の人に信頼される	.220	.107	.254	.508	-.063	.016	.145
第5因子：派手やかさ (5.5%)							
豪華な生活をする	-.062	.283	.115	.057	.711	.156	.112
有名になる	.016	.090	.083	.055	.583	-.076	.045
第6因子：自由と気楽さ (4.8%)							
自由な時間	.052	.171	.022	.170	.082	.613	.171
気楽に生きる	.212	-.048	.095	.015	.042	.546	.096
第7因子：趣味世界の豊かさ (4.4%)							
おしゃれをする	.105	.322	.031	.074	.214	.156	.575
趣味を楽しむ	.125	.083	-.024	.154	.044	.285	.515
その他の項目							
金銭面の不自由がない	.203	.402	.151	-.022	-.057	.112	.192
人の役に立つ	.128	.065	.044	.431	.152	-.048	.300
長生きをする	.192	.240	.063	.202	.276	.087	.001
高い地位を得る	.061	.426	.488	.117	.337	-.038	-.009

また、「移り住むことを想定したときの立地・住宅要件」についても、因子分析（主因子法により因子抽出後、バリマックス回転）を行った。各因子に対して、高い因子負荷

表4：移り住むことを想定したときの立地・住宅要件に関する因子分析結果：各因子名・寄与率と因子に対する因子負荷量

因子	1	2	3	4	5
第1因子：周辺環境のよさ (24.0%)					
自然を感じることができる	.677	-.056	-.057	.223	.152
街並みが良い	.600	.062	.255	.164	.069
家からの景色が良い	.549	.018	.349	.162	-.003
陽あたりが良い	.501	.404	.026	-.007	.167
第2因子：利便性 (10.1%)					
駅やバス停まで近い	-.017	.738	.169	.138	-.009
スーパーやコンビニが近い	.038	.562	-.029	.361	-.119
第3因子：住宅自体の素敵さ (7.6%)					
住宅の外観が素敵である	.108	.108	.759	.116	.193
インテリアが素敵である	.114	.016	.735	.153	.150
第4因子：支援的環境の充実 (7.4%)					
福祉施設が近い	.204	.314	.000	.552	.057
親戚や知り合いが近所に住んでいる	.044	-.041	.130	.552	.154
第5因子：広さ (6.1%)					
庭が広い	.185	.007	.076	.140	.559
家が広い	.019	.087	.293	-.028	.544
その他の項目					
外部からのプライバシーが確保されている	.223	.295	.309	-.007	.303
住宅の設備が充実している	.446	.282	.288	-.009	.120
治安が良い	.375	.383	-.004	.003	.103
自宅や近所で趣味ができる	.117	.111	.178	.392	-.050
近所に大きな公園がある	.206	.183	-.029	.350	.242
気候が良い	.280	.402	-.005	.143	.228
家に車で接近しやすい	.116	.378	.164	.006	.254
病院が近い	-.001	.443	-.007	.442	.080

量を得た項目に基づき、第1因子は「周辺環境のよさ」、第2因子は「利便性」、第3因子は「住宅自体の素敵さ」、第4因子は「支援的環境の充実」、第5因子は「広さ」と名づけた。因子分析の結果は表4に示されている。

3.2 豊かさの重要度評価と移り住むときの要件に関する平均回答値

「人生の豊かさに関する重要度評価」と「移り住むことを想定したときの立地・住宅要件」の各因子で0.5以上の因子負荷量を得た項目の平均回答値を算出し、各因子に対する反応得点とした。また、各項目を被験者内要因として平均値差の検定を実施した。反応得点および、平均値間の差に関する検定結果は表5に示すとおりである。

表5：豊かさ因子と移り住むときの要件因子に関する反応得点平均（標準偏差）

豊かさ因子	移り住むときの要件因子		
家庭の豊かさ	2.50 ^a (0.39)	周辺環境のよさ	2.18 ^a (0.39)
自由と気楽さ	2.13 ^b (0.42)	利便性	2.17 ^a (0.47)
対人関係の豊かさ	2.07 ^b (0.37)	支援的環境の充実	1.78 ^b (0.45)
職業の豊かさ	2.04 ^b (0.45)	住宅自体の素敵さ	1.68 ^b (0.58)
趣味世界の豊かさ	1.85 ^c (0.45)	広さ	1.64 ^b (0.47)
資産の豊かさ	1.67 ^c (0.48)		
派手やかさ	1.13 ^d (0.30)		

異なる上付き文字を付与している平均値は $p < .05$ で有意差がある。

有意差検定の結果、豊かさに関しては、「家庭の豊かさ」が最も重要視され、ついで、「自由と気楽さ」「対人関係の豊かさ」「職業の豊かさ」と続く。さらに、「趣味世界の豊かさ」「資産の豊かさ」が続く。「派手やかさ」はもっとも低い評定値を示している。移り住むときの要件については、「周辺環境のよさ」と「利便性」に対する要求が最も高く、それらと比較して「支援的環境の充実」「住宅自体の素敵さ」「広さ」は低い値を示している。

3.3 豊かさとの立地・住宅要件との関係に関する構造方程式分析

豊かさとして重要視するものと立地・住宅要件として求めるものとの関係を検討するために、構造方程式分析を行った。分析では、「人生の豊かさに関する重要度評価」に関して得られた7因子に対する反応得点と、「移り住むことを想定したときの立地・住宅要件」に関して得られた5因子に対する反応得点を元に、豊かさの7因子すべてが、立地・住宅要件に対する5因子すべてに対して影響しているというモデルを想定した。さらに、豊かさの7因子間の相関と、立地・住宅要件の5因子に対する誤差変数間の相関を想定し、回帰係数の推定を行った。その上で、有意ではない回帰係数を示したパスをモデルから削除し、有意なパスのみを残して、モデルの適合度を検定した。最終的にデータに適合したモデル ($\chi^2 = 14.85, p > .8, NFI = .975$) における有意な回帰係数の一覧は表6に示されている。

分析の結果、豊かさの各因子は、それぞれ独自のパターンで立地・住宅要件に影響していることが示されている。「家庭の豊かさ」を重視するほど「周辺環境のよさ」や「広さ」に対する要求が、また、「資産の豊かさ」を重視するほど「住宅自体の素敵さ」や「広さ」に対する要求が高く

表6：豊かさと立地・住宅要件との関係についてのモデルにおける標準偏回帰係数

豊かさ因子項目	⇒ 立地・住宅要件因子項目	標準偏回帰係数
家庭の豊かさ	⇒ 周辺環境のよさ	.169**
	⇒ 広さ	.127†
資産の豊かさ	⇒ 住宅自体の素敵さ	.327**
	⇒ 広さ	.291**
職業の豊かさ	⇒ 利便性	.285**
	⇒ 支援的環境の充実	.211**
対人関係の豊かさ	⇒ 周辺環境のよさ	.188**
派手やかさ	⇒ 住宅自体の素敵さ	.236*
	⇒ 広さ	.230*
自由と気楽さ	⇒ 利便性	.195**
	⇒ 住宅自体の素敵さ	.128†
	⇒ 支援的環境の充実	.140*
趣味世界の豊かさ	⇒ 周辺環境のよさ	.203**
	⇒ 住宅自体の素敵さ	.451**

†: $p < .10$, *: $p < .05$, **: $p < .001$ でそれぞれ有意。

なっている。「職業の豊かさ」は「利便性」や「支援的環境の充実」の重視につながる一方、「対人関係の豊かさ」は「周辺環境のよさ」要求につながっている。さらに、「派手やかさ」の重視は「住宅自体の素敵さ」や「広さ」に、「自由と気楽さ」の重視は「利便性」「住宅自体の素敵さ」「支援的環境の充実」に、「趣味世界の豊かさ」の重視は「周辺環境のよさ」と「住宅自体の素敵さ」に連合している。

4. 考察

豊かさに対する因子分析結果は、予測どおり「豊かさに対する表象」が多様な側面を持つことを示している。同定された因子からは、豊かさが「物質的に満たされていること」だけではなく、自らをとりまく家庭環境や人間関係、仕事や趣味などの諸活動、ライフスタイルのあり方などのさまざまな領域において認識される概念であると示唆される。本研究で同定された7因子は、主婦を対象として調査票に含めた24項目からのみ抽出されたものであり、因子内容の一般性についてはさらに吟味する必要があるが、少なくとも「豊かさに関する表象」がここで同定されたような多様な概念構造を持つことは間違いがないであろう。また、「移り住むことを想定したときの立地・住宅要件」に関しては、因子分析結果が質問項目に依存するので単純な比較はできないが、住環境を評価する際に独立した次元としてこれまでの研究で同定され用いられている内容からの大幅な逸脱は見られない（崔・浅見，2003；齋藤・小瀬，2000；荘・木村・鈴木・梶，1997など）

豊かさの各因子に対する得点平均からは、「家庭の豊かさ」という、自分の身近な周辺環境が円満な状態にあることが最も重視される一方で、派手やかさのような野心的欲求と連合した豊かさ志向が低いことが示される。家庭に生活基盤を置いた主婦層が分析対象であることを考慮すれば、家庭の豊かさを重視するというのは当然の結果ともいえるが、今後、他のサンプルと比較しながら、豊かさの概念構造の記述を洗練させていく中で、重要度評価について

も考察する必要がある。

構造方程式分析結果からは、多様な側面を持つ豊かさに関する表象が、住環境に対する要求と密接に関連していることが示唆される。まず指摘できるのは、どのような側面での豊かさ重視するかという志向性と住環境特性に対する要求の間に「精神的な豊かさ」と「物質的な豊かさ」を軸とした意味的な対応関係が伺えることであろう。精神的な豊かさを追求するために必要とされる住環境条件として示されているものを見てみると、住宅が存在するコミュニティ環境そのものが充実している必要と住宅そのものを持つ余裕が重要な要件として浮かび上がってくる。「家庭の豊かさ」、「対人関係の豊かさ」、「趣味世界の豊かさ」を重視する傾向は、「周辺環境のよさ」を求める態度につながっている一方、「家庭の豊かさ」は「広さ」と、「自由と気楽さ」、「趣味世界の豊かさ」は「住宅自体の素敵さ」を求める態度につながっており、精神的な豊かさを満たすためには「余裕」を感じることを可能にする住環境が必要とされていることを示唆している。その一方、「資産的豊かさ」と「派手やかさ」が、「住宅自体の素敵さ」と「広さ」に影響していることは、個人の一般的な特性として豊かさに関する物質的志向の高さが、住環境特性に対する「物質的価値」要求にもそのまま反映されていると解釈できよう。

このように、豊かさに対する重要性の評価と住環境特性に対する要求の間に対応関係がある一方、特定の住環境特性に対する要求が、複数の異なった豊かさ志向を基盤としていることにも注目すべきであろう。たとえば、「広さ」に対する要求は、「家庭の豊かさ」と同時に、「資産的豊かさ」や「派手やかさ」といった、ともすれば対極にあると解釈されるような豊かさ志向にも影響されている。また、「支援的環境の充実」に対する要求も、「職業の豊かさ」と「自由と気楽さ」に規定されているが、活動内容としては「仕事と自由な生活」という、相反する領域に属する豊かさへの志向性を求めているも、それを求める動機やそれによって実現したい生活のあり方が、基盤となる豊かさ志向により異なると想定することで解釈できるだろう。言い換えると、同じ住環境特性を求めているも、それを求める動機やそれによって実現したい生活のあり方が異なることが考えられ、特定の住環境特性を求める理由、根拠、また、それが満たされた場合に具体的にどのような生活が実現するとイメージされているのかなどが、豊かさ志向に応じて異なる可能性が想定できるのである。このような可能性は、豊かさに関する志向性や重要性の評価と住環境要求との関係を論ずるうえで、今後、両者の間を媒介する変数を想定した研究の必要を示唆している。また、住環境に求めるものや環境評価に関する価値観が性別や職業で異なるという知見からは（村川・西名・大石，2000；鈴木・宮崎，1996）、どのように特定の住環境で豊かさを実現するのかが評価者の属性によって影響されると推測されるので、主婦層だけではなく、多様な層からのデータを分析した上で、統一的に議論する枠組みの形成が求められよう。住宅は、われわれの日常生活で可能となる、または必要となる行為を直接規定し、そのことにより人間のさまざまな生活要求の実現

を可能にしたり不可能にしたりするものである。豊かさに関する志向性が、人間の具体的な生活要求に基づくと同時に、実現したい生活の具体的な特性にまず影響すると考えるなら、その特性に対応して、生活の具体的な特性に関連した住環境特性に対する要求が生じるというモデルが考えられる。本研究のデータは、そのような研究方向の基盤として重要なものであると共に、今後、より精緻な議論を行う必要を示したものとして、位置づけることができよう。

引用文献

- Baumeister R.F., & Vohs, K.D. (2002). *The pursuit of meaningfulness in life*. In Snyder, C. R. & Lopez, S. J. (Eds). *Handbook of positive psychology*. (pp. 608-618). Oxford University Press: London. .
- 崔廷敏・浅見泰司 2003 賃貸住宅居住者の満足度評価に見られる潜在的評価構造 都市住宅学 42 号 86-97.
- 古川秀夫・山下京・八木隆一郎 1993 ゆとりの構造 社会心理学研究 9、171-180.
- 八田武志、唐沢かおり、豊沢純子、山岡洋 2004 豊かさに関する調査研究：K J 法による検討 (未発表)
- Huebner, E.S., & Gilman, R. (2002). An introduction to the *Multidimensional Students' Life Satisfaction Scale*. *Social Indicators Research*. 60, 115-122.
- 近藤勉・鎌田次郎 1998 現代大学生のいきがい感とスケール作成 健康心理学研究、11、73-82.
- 村川三郎・西名大作・大石洋之 2002 評価者の価値観からみた地域景観の総合満足度に関する分析 日本建築学会計画系論文集 556、83-89.
- 中野孝次 2000 清貧の思想 文芸春秋社
- 齋藤伊久太郎・小瀬博之 2002 住民のアメニティ評価構造に対する外部空間の評価の影響 日本建築学会計画系論文集、561、101-106.
- Schuessler, K.F., & Fisher, G.A. 1985 Quality of life research and sociology. *Annual Review of Sociology*. 11, 129-149.
- 荘美知子・木村翔・鈴木久恵・梶裕佳子 1997 集合住宅の住環境全般と音環境に対する居住者評価の分析 日本建築学会計画系論文集 493、9-15.
- 鈴木博志・宮崎幸恵 1996 首都圏における公団単身居住者の住宅特性、住宅改善要求の検討 日本建築学会計画系論文集 480、137-146.

注

本研究の一部は、平成 15-18 年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究 A(2) (研究代表者・久野覚、課題番号 15206063、「豊かさ」を考慮した新しい住環境評価法の開発) により行われた。

(受稿：2004 年 3 月 29 日 受理：2004 年 5 月 20 日)